



令和4年「寅年」の絵馬

## 清水 第二三四号 目次

表紙題字・良慶和上筆 表紙写真・「ゆく年くる年」の本堂雪景色

(撮影・提供 安田格氏)

心にやどるお月さま ..... 清水寺貴主 森 清範 :

大西良慶和上法話「太子和讃講話」① ..... 清水寺貴主 森 清範 :

五明洞淨墨 原徂山「田中角栄訪中書感」和詩 ..... 清水寺貴主 森 清範 :

聖徳太子像遷座し千四百年御聖諱法筵奉修 ..... 清水寺貴主 森 清範 :

数寄者平井仁兵衛氏の足跡と清水寺 ..... 清水寺学芸員 坂井輝久 :

「清水寺・古写真館」 大正6年竣工の成就橋 ..... 清水寺貴主 森 清範 :

『四十手深要決義』を読む 第21回 ..... 清水寺執事補 森 清顕 :

経堂と西門でnendoが美術展 ..... 清水寺貴主 森 清範 :

『成就院日記』翻刻・刊行にあたって② ..... 清水寺史編纂委員 田中香織 :

月照上人ゆかりの松屋から落慶祝い懇志 ..... 清水寺貴主 森 清範 :

「花の庭」令和再興し「雪月花の三庭苑」そろひ ..... 清水寺貴主 森 清範 :

異例の五輪開催、「今年の漢字」が「金」に ..... 清水寺貴主 森 清範 :

ピンクの花供え乳がん犠牲者を追善供養法要 ..... 清水寺貴主 森 清範 :

コロナ宣言解除で修学旅行生が森貫主と交流 ..... 清水寺貴主 森 清範 :

阿彌流為・母禮の慰靈法要に80名が参集 ..... 清水寺貴主 森 清範 :

津軽音羽会、森貫主にもち米奉納目録を贈呈 ..... 清水寺貴主 森 清範 :

厳しい時代に同和園管理職が心新たに祈祷参拝 ..... 清水寺貴主 森 清範 :

## 内外往来

編集後記

# 心にやどるお月さま

清水寺貫主 森 清範

昨年秋のことになりますが、新型コロナウイルス感染拡大の緊急事態宣言が十月一日に解除され、にわかに感染する人が少なくなりました。七月下旬から九月初めまでの夏の間はまことに厳しい状況が続

いて、京都でも一日の感染者が六百人も発生した日がありました。それが不思議なくらいに治まり二日続けてゼロとか、あるいは感染者があつても一人とか二人とかという日が続いて穏やかになりました。皆さん、いかがお過ごしでしたでしょうか。落ち着いているいまのうちに、これまでできなかつた用事やら行楽やらをやろうと思つた方もきっと多かつたのではないか。

世の中、穏やかになつて私も久しぶりに安らかな気持ちになつて十月を過ごしておりました。急に空気が冷たく入れ替わって、音羽会がありました二十

三日には早くも木枯らし一号が吹きました。寒くなりましたが、気分的には心豊かなものがありました。そのようなことも手伝つてか、朝、本堂にお参りに



法話する森 貫主

出て冷たい秋風に吹かれた時に、ふと昔の歌を暢氣(のんき)に思い出したりしました。平安時代の歌人に藤原俊成という有名な人がおります。

夕されば野辺の秋風身にしみて  
鶴鳴くなり深草の里

俊成の名歌であります。深草は京都市の南の方の地名です。いまは町になっていますが、平安時代は都外れの鄙びた里であります。ですから冷たい秋

風が身にしみて寂しいのです。寂しいのは風の冷たさや鶴の鳴き声ばかりにあるのではなく、恋人と別れた悲しさが歌に込められているようです。

そして自坊に戻って新聞を見ていましたら、高浜

虚子の俳句が出ていました。

秋もはや熱き紅茶にビスケット

「なるほどなあ、もうそんな季節やな」と感心しました。この句は虚子が明治製菓のために作ったものだそうです。

### 「顔学」から見たマスク

日本は秋の間、コロナ禍が穏やかに落ち着いておりましたが、外国は大変な状況でした。イギリスもドイツもロシアもアメリカも大きな感染の波が起きておりました。やはり感染対策をきちんと守るのが大切です。三密すなわち密閉と密集と密接を避ける、そして手洗いと消毒を心掛けて、マスクをすることです。アメリカのバイデン大統領はマスク姿でテレビに出てきますが、トランプ前大統領はマスクをせんでした。支持者の集会を見てもマスクをしない



『小倉百人一首』の藤原俊成（菱川師宣画、延宝八年刊）、  
国立国会図書館デジタルコレクション

人がたくさんいます。ドイツではお店でマスクして買い物するのが義務付けられているそうですが、それでもマスクしない客に注意した店員が拳銃で射殺される事件まで起きていています。日本では考えられません。日本人はまことに律儀なものがあります。

マスクをしますと顔の半分が隠れてしまいます。

親しい人なら目を見ただけでわかりますが、それほどでもない人は出会っても誰かわかりません。昨日も境内を歩いておりましたら「おはようございます」と出会った人から挨拶されました。こちらは法衣を着ていますから「寺の和尚さんやな」とすぐにわかるのでよろしいですが、私の方は向こうの人がわかりません。まして相手が帽子をかむつていたりしたら、目しか出ていませんので見当もつきません。

おばあさんマスク取つたらおじいさん

こんな川柳が新聞に出ておりました。確かにそういうことがあります。

東京大学名誉教授の原島博という偉い先生が顔の学問を研究しています。「顔学」というのだそうです。このような研究分野があるのであります。確かに相手

が誰であるかとか、どういう人物か知るのも顔を見て判断します。自分の気持ちを伝える時にも、相手の心の中を読み取る時にも顔の表情が重要な役割を果たします。こういう顔の持つもろもろの働きを研究するのが「顔学」です。

その原島先生がマスクについて面白いことを言っています。英語でマスクと言つたら第一に仮面の意味です。欧米の人は顔を隠す時は、顔の下半分は隠さないで、顔の上方、目元を隠します。ですから西欧のヒーローであります怪傑ゾロもバットマンも目元を覆つて、口元は出しています。顔の上半分は何を表すかといいますと、その人が何者であるのか、表面上のことが現れ出ています。

それでは鼻から下の方、口元はどうかといいますと、その人の内面、心のありようが現れてくるといふのです。欧米の人を見ていてみると、会話をする時は身振り手振り表情いっぱいに出して相手に気持ちを伝えようとなります。そういう習慣があります。ですから口元を隠すのを嫌がります。相手に心が伝わらないからです。こういうことでマスクを着けたが

らないわけです。

## 内心を出さない日本人

ところが、日本人はあまり内心を出したがらない。口で言うことと腹の内が違うことがよくあります。それでも許される社会があります。例えば、皆さんもよその家に行つて手土産のお菓子を出す時に「まことに粗末なものです」と言います。相手にしてみたら「そんな粗末なもの、持つてくるな」と言いたいところですが、持つてきた人の内心は違います。「これはわざわざ買つてきた上等の菓子や。おいしいよ」と思っています。しかし、決して口には出しません。お見合いをした時も、お母さんが娘さんに「どうや、あの人は」と聞きますと「うーん」とはつきりした心の内を見せません。それでお母さんが「それなら、あの人、嫌いか」と問い合わせますと「嫌いと違います。好きになれないだけです」と曖昧に言って済まそうとします。それから人に家によばれた時など、「お茶にしますか、コーヒーにしますか」と尋ねられると、京都人は「お茶でいいです」

と答えます。「お茶がいい」「コーヒーがいい」とはつきり言いません。微妙に言つて内心をはつきりさせません。このような日本人の習慣は言い出したら切りがないくらいあります。ですから口元を隠すマスクには抵抗がなく、お手の物であるわけです。そういえば日本のヒーロー鞍馬天狗も月光仮面もしつかり口元を隠しています。マスク一つとっても文化の違いが出ているのだと興味深く思いました。

とにかく新型コロナウイルスには感染対策が重要であります。昨年十月に元オムロン社長で京都商工会議所の会頭でありました立石義雄さんのお別れ会が国立京都国際会館でありました。コロナも収まっておりましたし、私も是非お参りしたいと思いまして返事の葉書を出しましたところ、午前十一時十五分から十一時三十分までの十五分の間に来てくださいというのです。そんなにぴったり到着できませんので、早目に行って外で待っているしかありません。それほど密にならぬよう考慮しているのです。翌日の新聞を見ますと、東京にもお別れ会の会場を設けていて合わせて三千人が訪れたそうです。

京都が半分だとしても千五百人、一遍に来たら国際会館はごった返したでしょう。このたび新しいイベントホールが出来て初めて入りましたが、正面の祭壇には大きな写真を掲げて菊の花が見事に並んで圧巻でした。さすがに商工会議所の会頭さんだと感嘆しました。しかしながら、いかに大きな建物であると密閉、密集、密接はいけないです。十分に気をつけないとコロナを移し、移されるということになります。

### 月に二つあるのを知っているか

話は元に戻りますが、急に空気が入れ替わって冷たい秋風が吹いた朝、本堂にお参りして西の空を見ますと、実に美しい月が出ておりました。秋は空が澄んで月がきれいです。夕焼けのお日さん、ご来光の太陽もよろしいが、夜空にくつきりと浮かんだお月さんは何とも言えない清楚なものがあります。西山に沈んでいく大きな月を見て、曹洞宗で言われている月の話を思い出しました。有名な「両箇の月」<sup>りょうく</sup>という禅問答になっています。

日本の曹洞宗はご存じのように道元禅師が開かれました。永平寺と總持寺が二大本山となつております。全国に約一万五千カ寺もの寺院がある一番大きな教団であります。道元禅師がそのような大きな教団をつくりあげたわけではありません。道元禅師から四代目の祖師に瑩山紹瑾けいさんしょうきんという禅師がおられます。観音さまと清水寺に深いご縁のある方であります。瑩山禅師は禪はもちろんのこと天台宗や神道も広く学ばれた方で、能登に總持寺を開かれて曹洞宗が大きく発展していく基礎をつくりました。その弟子に峨山詔碩がさんじょうせき禅師がおります。一番弟子の明峰素哲禅師とともに「二神足」と呼ばれておりますが、ある秋の夜、瑩山禅師と澄みわたる空に輝く月を眺めていたそうです。そうしますと瑩山禅師が「お前は月に二つあるのを知っているか」と尋ねました。峨山禅師が「知りません」と答えますと、瑩山禅師は「月に両箇あるのを知らない者は曹洞禪の繼承はできないぞ」と厳しく叱られました。それから峨山禅師は何年も修行を重ね、この「両箇の月」の問い



清水寺南苑に建つ曹洞宗太祖瑩山禪師報恩顯彰碑

に悟り得て許されたそうです。やがて瑩山禪師から  
総持寺住職を譲り受けて数多くの弟子を育て、曹洞  
宗を一大教団へと導いて行つたのです。

「月に二つある」——これは禅問答でありますので  
禅宗なりの独特な教えがあるのだと思いますが、わ  
れわれ法相宗の立場から考えますと、空にこうこう  
と輝いています月は法身、すなわち仏性であり、そ  
れが空に一つあるのです。そして私たちすべての人  
は心に映す鏡を持っていて、お月さんがもう一つ映っ  
ているのです。月が二つあるけれども、それらは相  
対しているのです。本当は一つであり、相対の関係  
から絶対の世界に行きますと一つだということです。

### お月さんを受ける受けⅢ

映す鏡を持っているのは私たち人間だけではありません。  
川にも池にも水溜まりにも、草の葉に降りた露にも月は映ります。大西良慶和上はこんな歌を  
詠んでいます。

草の葉の露にも月はやどるなり  
心をみがけ道の友人

心を磨いて澄ませば、仏さまの月が映るのです。清水寺のすぐ近くにあります知恩院は法然上人が開かれた浄土宗の総本山です。その法然上人が詠まれた「月かけ」という歌があります。

### 月影のいたらぬ里はないけれども

ながむる人の心にぞすむ

月はどのような所でも、どのような人であろうとも満遍なく照らします。月が照らさないところはないのです。けれども眺める人があればこそ月が照っていることを承知できます。法然上人はお月さんを



阿弥陀堂に祀られている法然上人

受ける受け皿をしつかりしなさいと言っているのです。そして、受けたお月さんと一体になって、相対から絶対の世界にいたることが大切です。禅宗やお茶席で好んで使われている中国の古い詩の句があります。

水を掬すれば月手に在り  
花を弄すれば香衣に満つ

水を両手ですくえば、その手の中に月が映って入り、花を手にとれば、その花の香りが衣服に移って体全体がいい香りに包まれるというのです。月と私、花と私が一つになっています。すなわち仏心と私とが一体です。

### ひと言で心が変わる

もう五年前になりますが、栃木県の那須町で雪崩事故がありました。登山講習会に来ていました栃木県立大田原高校の生徒たち七人と引率の先生一人が亡くなる痛ましい事故でありました。その大田原高校がある大田原市には那須音羽の会という清水寺と親しく交わりを持っている市民の会があります。代

表世話人は館田岩次郎さんという方で、会の皆さんから「岩ちゃん、岩ちゃん」と呼ばれて慕われています。明治大学スキー部OBとして、プロ野球の名投手で名監督でした故星野仙一氏と大学時代は運動部仲間でした。こういうことで館田さんは雪崩事故には殊の外心を痛めておりました。

雪崩の犠牲者の中に高瀬淳生さんという高校一年生がありました。事故の後、高瀬さんは人工呼吸器がつけられ医者が懸命に心臓マッサージをするような容体でした。この様子を見てお母さんはなんとしても回生してほしいと願ったのですが、その一方で「もう助からない」と分かったそうです。そして、十六歳の自分の息子がまだ世の中の役に立っていない、何か社会貢献したいと思っていたに違いないと思いつきました。医者にそのことを伝えますと、角膜の提供ができると言われました。お母さんは息子の角膜が目の不自由な人の目となり社会のためになると思いお願いしました。しかし、提供の手術によって顔に傷がつき顔が変わるかもしれないと説明され、息子を送るのにつらいと思い直し「やめよう」

と考えました。その時、高瀬さんのお兄さんが「僕が弟だったら、きっと角膜の提供をしてくれと言うだろう」と話しました。その言葉にお母さんはハッと気が付き、心が変わりました。息子の純真な心の光が差し込んで、それをしっかりと受け止めて心が変わったのです。受け皿があつたのだと思います。

こうして高瀬さんの角膜は世の中の誰かの目となり生き続けることになりました。社会に貢献したいという願いは生き続けています。那須音羽の会の館田さんを通じて、お母さんの心の指針となるような言葉を書いてほしいという依頼がありました。それで雪崩事故の遺族の皆さん八人に「光明不滅」と色紙に揮毫して贈りました。身体は亡くなっていますが、その靈魂の発する光明、靈力の働きは滅びることなく、遺族の心にしっかりと受け止められて滅びることがないという思いからです。おそらく今もなお遺族の皆さんの中に光明が輝き続け、それを日々拝みながら、一体になって暮らすことを嘗んでおられることがあります。